Osaka University Knowledge Archive

Title	古今集語彙の研究
Author(s)	神谷, かをる
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42697
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏　　名	神谷（かみたに）　かをる
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16395　号
学位授与年月日	平成13年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学　位　論　文　名	**古今集語彙の研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　前田　富祺 （副査） 教　授　蜂矢　真郷　　教　授　伊井　春樹

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、初めての勅撰和歌集である古今集の語彙の特色を探り、和歌という位相の中での語彙を考究したものである。本論文は、「はじめに」、第一章「古今集に見られる言語観」、第二章「古今集の語彙の特色」、第三章「古今集の語彙の語構成」、第四章「万葉集・新撰万葉集から古今集へ」、第五章「古今集と詩語との関わり」及び「おわりに」からなる。(400字詰原稿用紙に換算660枚)

「はじめに」においては、本論が、歌語も含めて和歌の語彙全体を眺め、その中で、いかなる語彙が和歌に好まれるか好まれないかを探ることを目的とすると述べる。

第一章では、古今集の和歌に見られる言語観を探り、それを手がかりに語彙としての問題を考える。古今集は、「言の葉」という言葉を好み、また、掛詞も多く、物の名を詠み込むなどして、言葉そのものを素材にすることの多い歌集であると述べる。

第二章では、古今集でむしろ、用例の少ない語を探り、語彙の特色を考える。第一節では、まず、身体語彙について、平安時代の仮名文学における用例を調査し、類聚名義抄などの辞書には見出せない語の多いことを明らかにしている。たとえば、古今集では髪・目・手などの基本語以外はほとんど用いられていないことを確認し、その理由を探っている。第二節では、死を表現する語がほとんど使われず、歌語「恋ひ死ぬ」のみが比喩的に使われていることを論じている。第三節では、古今集には、漢文訓読語が用いられないこと、感情語彙が多くないことを述べている。第四節では、仮名文に用例があるのに、古今集には一例しかない語について調査している。それらには生活語彙が多いことを明らかにしている。

第三章では、語彙の語構成を考察している。第一節では、古今集語彙と万葉集語彙とを対照し、共通する形態素を用いていることの多いことが明らかになった。第二節では、形容動詞について考察している。第三節では、複合動詞を取り上げている。古今集では、和歌の技巧（掛詞）と関係して用いることが多く、複合度は強くないことを確認している。

第四章では、古今集以前を取り上げている。第一節では、万葉集と比較して、「風の音」を、いかに表現してきたかを考察している。風の音を、和歌に詠むことには、漢詩文や漢語の影響が考えられると述べる。また、「涙」は本来は嫌われた語であるが、それが和歌に用いられるようになったことには漢詩文の影響が強いことを明らかにしている。第二節では、新撰万葉集と古今集とを対照し、古今集では漢字二字の漢語を訓読した和語を用いる傾向のあるこ

とを、明らかにしている。

第五章では、古今集では四季を表現する語彙や自然を描写する語彙の多いことについて論じている。語構成でみると、和語を漢字で表わすと「秋－風」のごとく漢語二字で表わされるものが多く、漢詩文・漢語と共通するものが大部分であることを明らかにしている。

「おわりに」では、全体のまとめと今後の課題などを述べる。

論文審査の結果の要旨

和歌に用いられる語は、歌語の問題として、古来文学上の関心から論じられてきたが、国語学の問題としての語彙の問題はほとんど扱われてこなかった。しかし、和歌の語彙は、平安時代の語彙の中でも後の物語などにも影響を与えるなど重要な位置を占めているのである。古今集は、平安時代にすでに古典的な書物と考えられ、同時代や後の時代の和歌集、源氏物語などの文学作品に多大の影響を与えてきた。個々の語ではなく、古今集全体の語彙の特色を探ることは、和歌の語彙のみならず、物語などの語彙を知る上でも大いに意味があることと思われる。

そのような状況の中で、本論文は国語学的な語彙の考え方にたって、古今集を研究しようとしている点で注目される。特に、かならずしも和歌に特有の語だけでなく、語彙を全体的に扱おうとしているところは高く評価される。そのような考え方から、古今集の中ではあまり使われていない身体語彙を考察したり、訓点語系の語彙を検討したりしているのである。古今集の語彙の構造を考えるために、万葉集や新撰万葉集の語彙との対照をも試みている。特に漢詩文との関わりを明らかにしたところは高く評価されよう。

もちろん今後に残された問題も多い。いろいろな面に関心を持つあまり、問題を多角的にとりあげたためにやや全体の構成のまとまりが弱くなった感じがすることは否めない。また、別に発表した論文を注で触れるに止め、本論文だけを見た時には分かりにくくなっているところがないわけではない。漢語との関わり、訓点語との対照など、なお検討すべきところがあるようにも思われる。もちろん、今後に残された課題はあるとしても、本論文が古今集の語彙の研究に新見を加えたことは明らかである。したがって、本研究科委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。